

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 武蔵国分寺出土縦置き型一本づくり軒丸瓦の系譜に関わる予察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-04-19 キーワード (Ja): 縦置き型一本づくり, 製作工程, 上野系, 伝播, 武蔵国分寺 キーワード (En): 作成者: 昼間, 孝志 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002000311">https://doi.org/10.57529/0002000311</a>

# 武蔵国分寺出土縦置き型 一本づくり軒丸瓦の系譜に関わる予察

昼間孝志

## 論文要旨

武蔵国分寺創建瓦には縦置き型一本づくり（以下、縦置き型）の一群がある。縦置き型は瓦当と丸瓦を「とも土」で製作する技法であるが、製作工程は地域によって異なることが報告されている。坂東での縦置き型は上野国上植木廃寺の補修瓦に始まり、以降武蔵北部の寺院や武蔵国分寺等に伝播し、それらを「上野系」一本づくりと呼称している。「上野系」は瓦当裏面に有紋り、丸瓦凸面に米字叩きまたは格子叩きという組み合わせを基本としている。同範例は少なく、生産地（窯）はほとんど分かっていないなど不透明な部分も多い。武蔵国分寺では創建瓦の一つである「上野系」軒丸瓦の導入について、これまで五明廃寺や南比企窯跡群（以下、南比企）を経由して伝播したとされてきたが、寧ろ軒瓦等の組み合わせや関連遺跡の分布状況から皂樹原廃寺<sup>(註1)</sup>を核とする武蔵北部の包括的な運営組織との関連性によるものと考えた。また、縦置き型の生産地は、出土例から南比企で行われたとされてきたが、武蔵国分寺の縦置き型には南多摩窯跡群（以下、南多摩）や産地不明の製品も含まれていた。武蔵国分寺では創建当初から造瓦体制を多元的に整備構築していく方法が採られていた可能性が高まった。

キーワード：縦置き型一本づくり 製作工程 上野系 伝播 武蔵国分寺

## はじめに

瓦当と丸瓦部を一体で製作する一本づくり<sup>(註2)</sup>軒丸瓦には、横置き型一本づくり（以下、横置き型）と縦置き型がある<sup>(註3)</sup>。横置き型は奈良時代前半以降、西日本を中心に広く展開し、平瓦の一枚づくりとともに後の瓦生産における大きな技術革新となった。これに対して、縦置き型は横置き型より早い7世紀第4四半期頃に登場するが、特定の地域に分布するものの大きな技術的展開とはならなかった。その初現は近江国南滋賀廃寺の川原寺式軒丸瓦で、丸瓦部は側板連結模骨を用いて製作され、瓦当裏面に布の紋り目を有する（以下、有紋り）タイプである。また同じ頃近江国に隣接する飛騨国寿楽寺廃寺（信濃国明科廃寺と

同筈) や三仏寺廢寺等の縦置き型は、丸瓦部を内型 (= 杵型・堅木、以下内型) で製作し、瓦当裏面に布目を有しない (以下、無紋) タイプである。同時期におけるこうした瓦製作技術の相違は工人の違いによるものか、前者の瓦製作技術の中から発生したものかは明らかになっていない。

一方坂東における縦置き型は、近江国から30年程遅れた8世紀前半に登場する上野国上植木廢寺の単弁軒丸瓦が初現である。丸瓦部は南滋賀廢寺と同様、側板連結模骨で製作され、瓦当裏面が有紋りのタイプであるため、近江国からの上野国へ伝播したと考えられている。しかし、時間的空白が製作技術の伝播を考える上で疑問視する向きもある。武蔵国分寺では上野国の有力氏族による関与によって「上野系」が創建瓦となり、瓦当裏面も上野国で見られる変化と同様に有紋りから無紋りへと変遷すると考えられてきた。しかし、このような考え方は従来の軒瓦や瓦当紋様中心の研究に基づいたもので、本来寺の建物に最も多く葺かれた丸瓦や平瓦は研究対象としておらず、瓦製作の技術や生産、作業工程に関わる分析など今日まで残されている課題は多い。

本稿は武蔵国分寺出土の縦置型について、主に製作技術的側面から関連する地域の縦置き型の資料を分析し、導入された背景や系譜について検証するものである。

## 1 縦置き型の定義と研究史

「瓦当部と丸瓦部を同時に作り上げること」と最初に提唱したのが木村捷三郎の一本づくり軒丸瓦製作にかかる定義である。この定義から読み取れるのは、初めに内型 (= 堅木) に粘土を巻き付け、粘土円筒を拵える。さらに粘土円筒を折り曲げて内型上部 (瓦当になる部分) を覆い、範型を押し当て、丸瓦部は叩きなどで調整して同時に仕上げるという製作工程である。一方、「所謂一本づくり」技法という呼称がある。これはその製作工程において、別の粘土を足して瓦当部を作る場合等も含んでいる。これらを一本づくりと呼ぶか否かは議論の余地を残すが、全国で示されている一本づくりにはこのような事例も多数含まれている。

研究史的にその経緯を概観すると、木村が提唱する以前に小林行雄は丸瓦円筒を桶型上に置き、さらにその上に瓦当となる粘土を載せ、紋様型を押し付けた後、丸瓦円筒の不要部分を裁断するという製作工程を復元した (小林1964)。また稲垣晋也も小林の復元案を発展させ、内型に粘土板を巻き付け、その上部に瓦当部を保持する粘土を載せ、粘土を詰めこんだ範型を被せるといった復元案を提示し、縦置き型の名称が確立する以前に様々な技術論が展開されてきた (稲垣1970)。

その後1970年代後半以降になると、南滋賀廃寺や榎木原遺跡（窯）の川原寺式軒丸瓦を例とした技術論が林博通をはじめ多くの研究者によって展開され、今日に至っている。基本的に范型の置く位置や内型を押し当てる位置によって、概ね二つの製作工程案が示された。

一つは、上原真人が提示した南滋賀廃寺の縦置き型の復元模式図である（第6図）。直立させた内型（既に布を巻き付けてあると仮定）に粘土を巻き付け、内型上部に上から范型を押し当てるものである。細かな部分は省略されているが、基本的に理に叶った案である。

北村圭弘は、第8図でその工程を細かに補足した。予め粘土を入れた布袋を内型上部に置き、布袋を反転させて内型に巻き付け、露出した粘土に范型を被せた後、内型に粘土を巻き付け、裁断前の縦置き型の原型が出来上がる。次に范型を下に、内型を上にした状態で丸瓦部を叩き具で叩き、不要部分を裁断・内型の取り外しを行い、范型を抜いて完成とするものである。

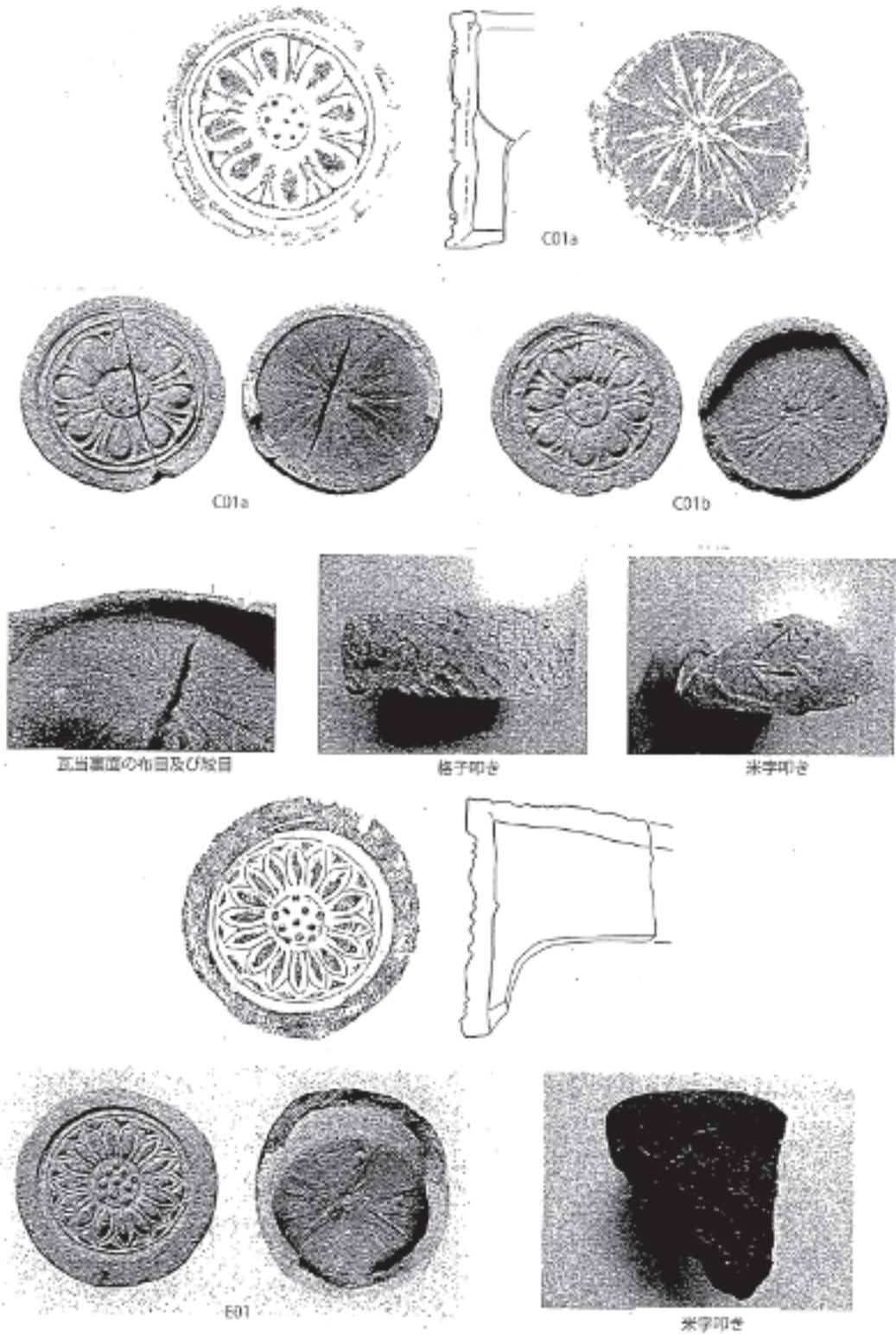
2つ目は林博通らが提示した南滋賀廃寺等の縦置き型の復元案である。范型を下にして范型に詰める粘土に内型を押し当て、粘土を巻き付けて製作するものである。この場合丸瓦部に施される叩きの痕跡は必ずしも円弧を描かない。円弧のある事例を考慮すれば、前者の復元案の本来縦置き型の製作工程であった可能性が高いが、布の巻き付け方やこの製作工程にかかる時間の効率性など解明すべき点も多い。

さらに検討しなければならないのが、内型の問題である。1案、2案とも製作過程の終盤では、范型を下に置いてその上に内型を推しあてる形を採っている。内型は木で作られたものと推測できるが、丸瓦部の長さを考慮するとかなりの重さになると考えられる。ある意味何度も繰り返して使用することを考えれば、軽い材は選択されない筈である。このような点を考慮した時、果たしてこの縦置き型での瓦生産は効率性や大量生産に向いていたのであろうか。以下、関連する地域と武蔵国分寺の事例から検討する。

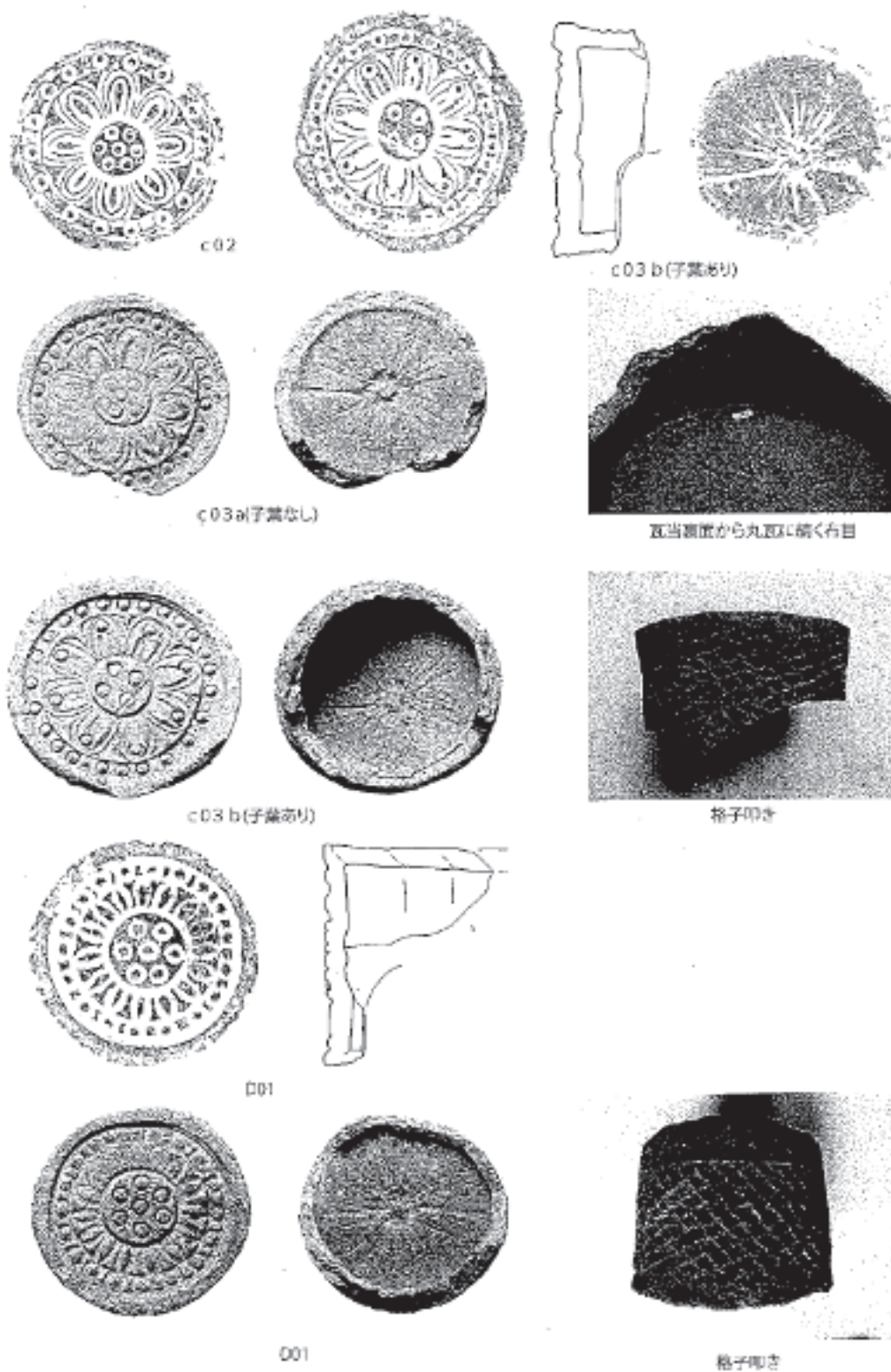
## 2 上野国と武蔵北部の縦置き型

### 2-1 上野国の縦置き型

上野国では坂東で最も早く、佐位郡上植木廃寺に8世紀第1四半期後半頃に出現した<sup>(註4)</sup>とされている。上植木廃寺では5種類の縦置き型が存在し、そのうち2種類は上野国分寺や武蔵北部の寺院と同范関係にある。上植木廃寺の縦置き型（第1図・第2図・有紋り）はC01、C02、C03、D01、E01の5種に分類され、内型ではなく近江国の縦置き



第1図 上植木廃寺出土瓦(1)



第2図 上植木廃寺出土瓦(2)

型と同様に側板連結模骨を用いるのが大きな特徴である。その後上野国では国分寺創建に際し横置き型も一時導入されるが、創建途中で縦置き型（無紋）へと技法が置き換わり、以後この縦置き型が上野国の造瓦技術の核として継続されていくことになる。

上植木廃寺の縦置き型は、5種すべてがほぼ同じ面径（約16cm）で製作され、創建瓦の面径を踏襲する。面径の踏襲は、この「縦置き型」は差し替え瓦（補修）として葺かれた可能性があることを意味している。また、瓦当丸瓦部には格子叩きと米字叩きが用いられ、基本的に叩きが丸瓦部広端（瓦当側縁）まで及ぶのが特徴である。瓦当や丸瓦部の厚さも1.5～2cmで、縦置き型（有紋）が製作されている期間は、一貫した規格のもとに瓦づくりが行われていたと推測される。また、範型は総じて当たりが浅いが、C01やE01は弁に対する中房の窪みや蓮子の低さが際立っていることで、瓦当文様の立体感を演出している。

縦置き型最古のC01は、単弁8弁で珠紋の有無でa（珠文なし）とb（彫り直し後、珠紋有）がある。このC01 aについて高井佳弘は創建瓦との相違を認めつつも「蓮弁には小さな棒状の子葉があり、創建期の文様の系譜を引いていることは確か」とし、縦置き型の紋様系譜が創建瓦にあるとした（高井2004）。このC01の紋様で特徴的なことは、間弁をすべて弁間に置くのではなく、不規則に4箇所配し、C01 bにおいては周縁と弁との間の圏線上に珠紋が22個付される。珠紋の出現がこの後の瓦当文様影響を与えていくことは、C03やD01以下の瓦範が竹管等を用いた文様が主体になっていくことでも理解できる（第3図）。

C01に続くのはE01と考えられている。いわゆる「細弁系」の単弁16弁軒丸瓦瓦で、上植木廃寺では最も多く出土する縦置き型である。この瓦は素紋の周縁がやや分厚く、一条の圏線上に2箇所の珠紋がある。新田郡寺井廃寺、武蔵国賀美郡五明廃寺と同範である。一見C01に始まる単弁8弁の系統に対して後出のような印象だが、C01に続く根拠として高井は「①丸瓦凸面の叩き目に格子、米字の2種類があること。②蓮華紋の周囲の圏線に壺錐状のもので珠紋が彫られること。③蓮弁・間弁の中央部を高く、基部と先端部を低くして花卉の外板を表現していること。特に中房の周囲を彫り窪めている。」とした。C01に続くと言う表現は、2箇所の珠紋がC01 bの意匠を継承すると解釈している。また、その生産時期も前後ではなく生産時期の重なりを提示した。

さらに次に続くのがC02、C03及びD01である<sup>(註5)</sup>。C01 bで付された珠紋は、C02、C03やD01では竹管で表現される。C02は瓦当紋様からもC01の系譜上にある瓦で、この段階以降珠文や蓮子は竹管で、それ以外の部分は範型で製作される。Co3はaとb2種類があり、aでは子葉がなく、bでは単弁8弁のうち4弁に子葉を彫り加える特異な軒丸

瓦である。丸瓦部の格子叩きは円柱状の材に格子を掘り込み、回転させたようで、格子の重複が1箇所確認できる。D01は「細弁系」の単弁15弁軒丸瓦で、上野国分寺に同範例がある。C03やD01と同様に珠紋や連子は竹管で施紋され、丸瓦部凸面の叩きも円柱状の材に彫り込んだ格子を回転させた仕上がりになっている。

なお、C01～05に伴う軒平瓦は特定できていないが、胎土の状況などから何も曲線顎の流水紋系や連珠紋系軒平瓦が想定されている。また、泥状盤築技法による瓦は確認されていない。

以上、上植木廃寺の5種類の縦置き型の主な特徴について記してきたが、以下のような問題点や製作工程も垣間見えてきた。

#### i 縦置き型の年代

8世紀第1四半期とされるC01の実年代であるが、丸瓦部に側板連結模骨を使用することや創建瓦との瓦当紋様における関連性など上植木廃寺のC01が坂東で最も古い縦置き型であることに研究者間でも概ね異論はない。天武朝頃に始まるとされる創建瓦A01～05までには数十年の時間が設定されている。その場合、伽藍が整うのは8世紀初頭であり、現在考えられているC01の年代観で差し替えを行うことは、自然災害等の不測の事態が発生しない限り可能性は低いと見るべきであろう。加えて他の縦置き4種の出土する地域、同範例、派生種などを考慮すれば、この縦置き型5種は寧ろ近い時期に連続して製作されたと考える方が自然であり、8世紀第2四半期頃の製作とするのが妥当ではないだろうか。

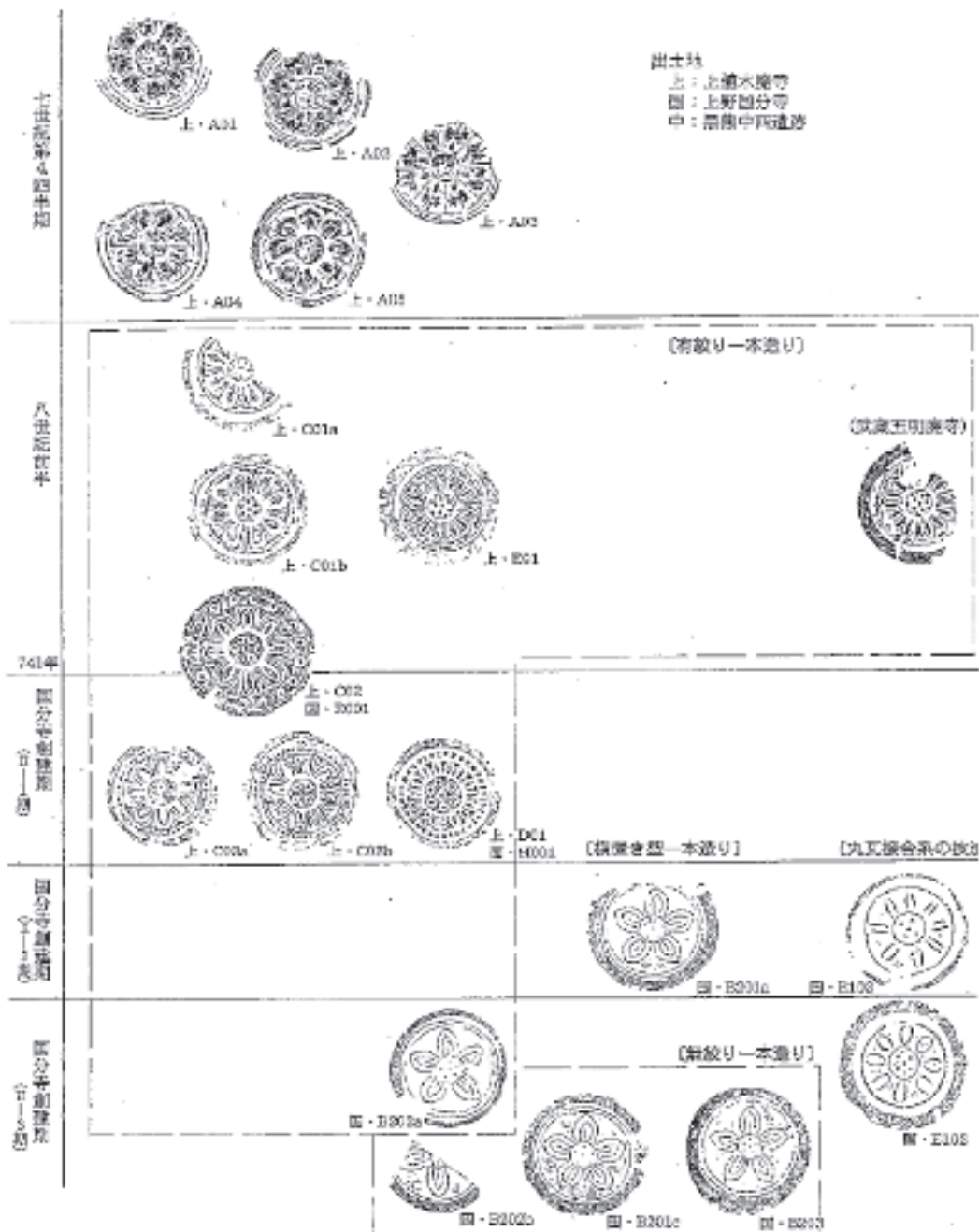
#### ii 製作工程

上植木廃寺の縦置き型は瓦当裏面がすべて有紋りであるが、その形状には製作工程の過程を窺わせる痕跡がみられる。中心部は布の被せ方によって紋目や凹凸が見られるが、丸瓦部の不要部分を裁断した後に残る凸帯の内側には僅かに布目が外側に向かって押されたような痕跡や、凸帯を外側や内側に押し込んだような痕跡がみられる。これは丸瓦部裁断後、凸帯側に引いて側板連結模骨（の内型）を外す場合や、外す際に外側にずれてしまった凸帯を内側に押し込んで修復したために生じた痕跡と考えられ、同様の事例は後述する武蔵国分寺の縦置き型でも確認することができる。

#### iii 生産地の問題

生産地はE01が新田郡の萩原瓦窯跡、C02が勢多郡の間野谷窯跡の可能性が指摘されているが、最古と考えられるC01、C03やD01については生産地が不明である。胎土や瓦範





第3図 上野国における主な一本造り軒丸瓦の変遷 (高井2004)

への粘土の詰め方などからはC01はC02やC03に近く、間野谷窯跡を含む笠懸窯跡群の地域で生産された可能性も考えられる。D01については文様面や竹管を使用する点を考慮すれば、笠懸地域で生産された可能性も排除できない。また、萩原瓦窯跡ではE01を寺井廃寺にも供給しているが、同範である五明廃寺のE01とは胎土も異なることから、萩原瓦窯での生産を終えた後に（工人とともに）範型と叩き具が移動したと考えられる。

#### iv 工具と製作技術

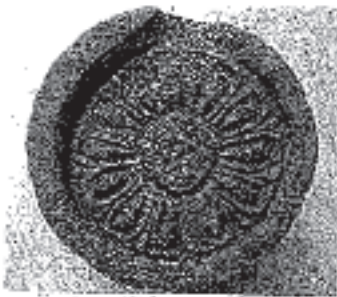
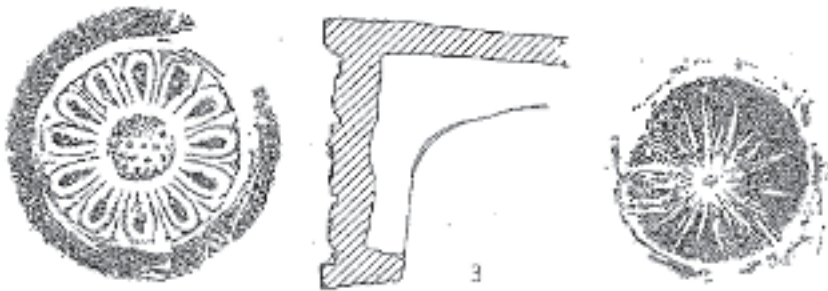
縦置き型には格子と米字の2種類の叩きが使用される。格子と米字の叩きは単独の場合と2種類を併用する場合があります、製作工房に同時存在したことが分かる。C02の叩きは不明であるが、C01とE01では格子と米字の叩きが使われ、C03とD01では格子叩きだけとなっており、形式的には米字叩きが古い段階に伴う要素の一つになっている。言い換えれば、米字叩きを伴うE01の年代が押し上がる要因でもあることや、範型や工具の保持に関わることである。縦置き型に関わるできるだけ多くの資料からの再検証も必要である。また、米字叩きと細部調整に関わる年代的な変遷については五明廃寺に関する記述の中で解説する。

## 2-2 武蔵北部の縦置き型

武蔵北部では上野国の寺院や上植木廃寺の影響を強く受けた瓦類が五明廃寺、皂樹原廃寺、精進場遺跡<sup>(註6)</sup>、城戸野廃寺、西別府廃寺などから出土する。本節では西別府廃寺、五明廃寺、皂樹原廃寺を取り上げて解説する。

武蔵北部における最古の縦置き型は、西別府廃寺の単弁12弁軒丸瓦（第4図3）で、C01との関連性が注目される瓦でもある。範型は1種類であるが、範傷の進行状況から三段階に分けることができる。この間範型とともに生産地の移動があったとみられ、胎土の異なる同範瓦が存在する。この瓦は弁数が異なるものの、C01と同様間弁が不規則で、6箇所配されるなど特異な面を持っている。面径は約17cmと上植木廃寺のものより一回り大きく、瓦当の厚さも約2.5cmとやや厚く製作されている。丸瓦部は格子叩きで、広端ギリギリまで叩き、この点も古い段階の特徴を備えているといえる。軒平瓦は創建段階から三重孤紋であるが、この時期主たる軒丸瓦が顎の短い三重孤紋であるのに対し、縦置き型には叩き具と胎土との関連性から顎の長い型挽き三重孤紋が組み合わさる。また、縦置き型が導入された段階の軒平瓦、丸瓦と平瓦<sup>(註7)</sup>には泥条盤築技法によって製作された一群も含まれ、造瓦に須恵器工人が関与していたことは明らかである。

五明廃寺は武蔵国賀美郡に在りながらもE01や曲線顎の流水紋や葡萄唐草紋軒平瓦、米



瓦当右下に範傷



布目は丸瓦部まで連続



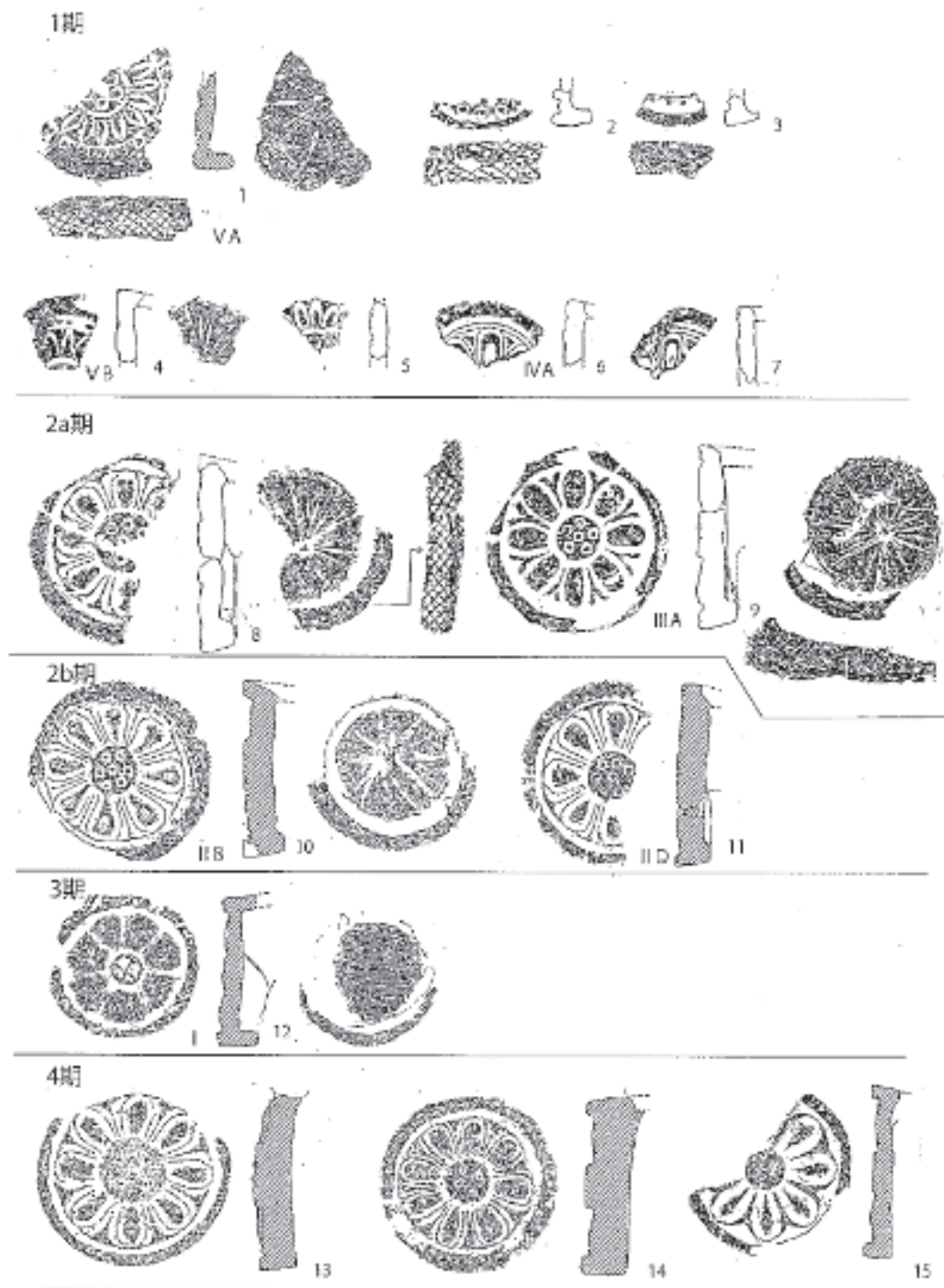
格子叩きは丸瓦広端部まで及ぶ

第4図 五明廃寺(1)・皂樹原廃寺(2)・西別府廃寺(3)出土瓦

字叩きが出土するなど上植木廃寺の影響を色濃く受けている。五明廃寺のE01は瓦当に範傷があることや丸瓦部広端（瓦当側縁）を2cm前後の幅で横ナデ調整することなどから、広端まで叩く上植木廃寺や寺井廃寺のE01より後出と考えられている。さらにE01は一定量出土することや格子や米字の叩きとの組み合わせから范型や道具類が工人とともに上野国から移動して来た可能性がある。五明廃寺には他に1種類E01と面径を同じくする縦置き型が存在し、C01bにも通じる圏線上に珠紋が巡るタイプの単弁8弁軒丸瓦である。年代は珠紋の出現を考慮すれば、E01とはほぼ同時期と捉えて良いであろう。また、五明廃寺には上植木廃寺とは異なる製作技術も見られる。泥条盤築技法による平瓦や、側板連結模骨ではなく内型を用いた丸瓦の使用などはその好例で、既に地域に在った技術も取り入れて瓦づくりが行われたと推測される。

五明廃寺の西方約5kmには、同郡内に皂樹原廃寺が位置する。五明廃寺と同様「細弁系」軒丸瓦や曲線顎の葡萄唐草紋軒平瓦、米字や格子の叩きなどが出土し、同范例はないが上植木廃寺等との関連性を想起させる寺院である。しかし、「細弁系」単弁16弁軒丸瓦に伴う曲線顎の流水紋・花菱紋軒平瓦などは紋様こそ異なるが、上植木廃寺に端を発する紋様や技術の要素が盛り込まれている。一方、皂樹原廃寺では、「細弁系」とは面径の異なる山王廃寺を祖型とする複弁7弁軒丸瓦<sup>(註8)</sup>や西別府廃寺と同范の複弁8弁軒丸瓦も出土し、これらには段顎や直線顎の二、三重孤紋が伴う。また、軒平瓦、平瓦の一部には西別府廃寺と類似した泥条盤築技法で製作された瓦も用いられている。このように皂樹原廃寺は、上植木廃寺と並ぶ上野国の中心寺院であった山王廃寺や武蔵の寺院の瓦も用いるなど五明廃寺とは異なる性格を持って造営された寺院であったと推測される。さらに皂樹原廃寺の周囲には製鉄関連（金屎遺跡）の遺跡や、女堀大溝を利用した25基に及ぶ細口式（横口付）木炭窯や大御堂遺跡などの大規模集落が存在するなど、この地域が政治的な意図も含め国家的事業を實踐していくための拠点の一つであった可能性も考えられる。

武蔵北部で縦置き型を有する寺院は、次第に賀美郡の周辺に集中していく傾向があり、その背景には古墳時代以降上野の影響下にあった地域ということを示し引いては考えられないであろう。一方、縦置き型の分布は上植木廃寺や関連遺跡との結びつきを感じさせる反面、上野にはなく武蔵国で独自に考案された複弁8弁系統の瓦が多く分布することもその後の武蔵国分寺への伝播を考える上で重要な意味を持つものと考えられる。また、この地域では泥条盤築技法を用いた造瓦形態も大きな特色の一つで、須恵器工人も取り込んだ寺院造営に関わる生産の実態も明らかになってきたといえる。



第5图 武藏国分寺出土瓦 (酒井1989一部改变)

### 2-3 武蔵国分寺の縦置き型

武蔵国分寺の創建瓦は「上野系」と「平城宮系」から成るとされている。「上野系」については縦置き型を指し、製作技法上経緯や生産地的見地から武蔵国分寺の縦置き型は「上野系」と理解されてきた。有吉重蔵は、「上野系」を現在5種11型式に分類している。有吉はそれらについて、珠紋を竹管で表現するもの（VA類）、范で表現するもの（VB類）、弁の均整や大型の中房のものをⅡA、ⅡC、ⅢAとし、退化傾向のあるものをⅡB、ⅡDと分類した。これに対して酒井清治は創建期における縦置き型の変遷を1期～4期（第5図）に分け、その中に有吉の分類を組み込んだ（第5図）。

1期は、「細弁系」及び薄手（単弁を含む）瓦当の一群を縦置き型の最古段階と位置付けている。破片が多く推定の域を出ないが、面径は約18cmである。酒井は「細弁系」の瓦について、「この瓦は細斜格子が瓦当周辺部まで叩かれているが、この叩き方および細斜格子は五明廃寺などの武蔵北部、あるいは上野の一本づくりに共通する叩きである」とした。確かに大きな共通項であるが、第5図1と2では竹管使用でも丸瓦部広端を叩いたままの土植木廃寺と先端部をナデ調整する五明廃寺では、それが「時間差」を意味し、珠紋は范型が先行し、竹管は後出であることも出土例などから明白である。また、范型の珠紋、叩き未調整の第5図2と3は古要素を持つが、珠紋は弁と周縁の間に配されるなど他の「細弁系」と同時期と見るべきだろう。生産地については、酒井が言うように産地不明の資料も確実に存在し、6や7（南比企産）を除いて論者は南多摩で生産された可能性を考えた。その大きな根拠となったのは、胎土に含まれる砂粒の多さや製作工程が南多摩産の特徴に類似していると確認できたからである。

2期は、瓦当紋様や裏面の状態によってaとbに分けられている。これらは縦置き型の製作上は同じものであり、分類と期を分割することへの意味は感じられない。2期の一群は1期と同様瓦当裏面有紋りで、いずれも単弁8弁軒丸瓦ある。面径は約20cmで、1期より一回り大きく、瓦当は約2.5cmとやや厚くなる。叩き具の状態や調整技法等を見る限り、1期と2期の時間的な差はなく、寧ろ面径など資料の個体差が顕著であることから瓦を葺く建物が異なった可能性がある。生産地については南比企と南多摩で生産された瓦がほぼ同数であったが、産地を特定できない個体も数点確認できた。また、格子や米字の叩きは瓦当周辺部まで叩かれた後、2cm前後の幅で横ナデされることから、縦置き型としては後出的といえる。瓦当裏面では不要部分の凸帯付近を中心にaとbでは微妙に相違が確認できた。aは連続する布に細い亀裂が入り、bではそれを修正するかのように瓦当裏面の円弧に沿ってナデ調整を行っている。分析個体数に限りがあるため断定できないが、この相違は范型の時間的消耗に起因する可能性も否定できない。

3期は無絞りの縦置き型が出現し、有絞りから無絞りへ転換する段階とされている。現在でも出土量は少なく、南比企で生産されたものが知られている。12は単弁（素弁）7弁、面径は約17cmと小ぶりで、中房に「父」の文字が入る<sup>(註9)</sup>。丸瓦部は平行叩き後、ヘラ削り調整されている。また、丸瓦と瓦当の接合は斜めになっており、瓦工人の製作というより須恵器工人によって製作された可能性が高い。さらにこの瓦が南比企で生産されていることや平行叩き、中房に「父」文字の使用は、新沼窯跡の操業年代と重なってくる。このような点を考慮すると、創建前半期とした3期の年代は繰り下がる可能性がある。

4期は接合式で製作される段階とされている。2期と4期では瓦の製作技法こそ異なるが、同範例も確認され、国分寺以外では無絞りの縦置き型も知られている。また4期の特徴として面径が19.5～20cm、瓦当がより厚手になること、（同範例などの関係から）範がやや消耗していることが挙げられる。加えて3期にみられた中房に「父」の文字が入る瓦が含まれるのも3期に近いことをうかがわせる。

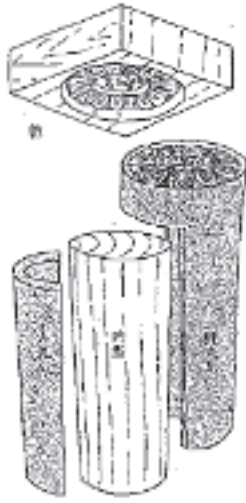
このように分割された1～4期の瓦には新しい要素と古い要素が混在しており、比較的短期間に生産された可能性が高いと考えられる。また国分寺創建期後半と考えられる新沼窯跡の操業期間を考慮すれば、これらの一群は全体的に製作年代が下がる可能性があり、自ずと国分寺創建年代もこれまで通説になっていた時期よりは遅れるであろう。

### 3 縦置き型の系譜と製作技術

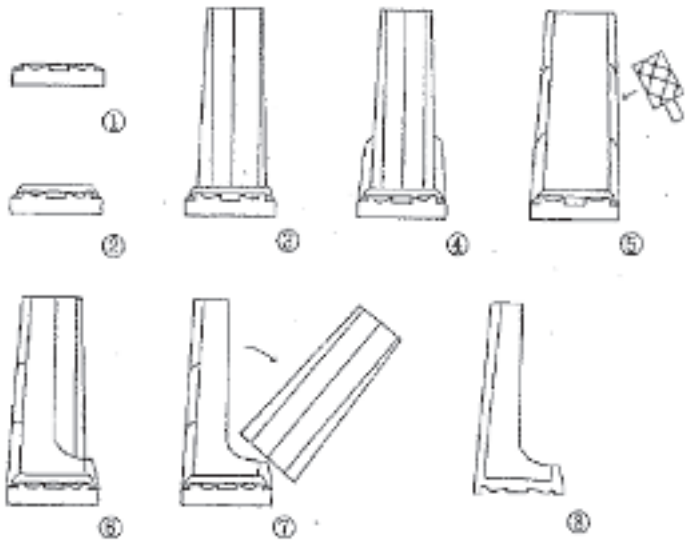
武蔵国分寺で出土する縦置き型について酒井の、「賀美郡の郡司層を含めた有力層が上野国、特に上植木廃寺を造営した首長層に協力を要請した」（酒井1989）とする説に対し、高井は「上野国が直接これらの瓦生産に関与した事実は確認できない。関与したのは武蔵北部の地域であり、そこでの瓦生産が地域的に近い上野国の影響下にあったためこのような現象が生じた」（高井2004）とし、直接的な関与を否定している。

論者は後者の考え方に基本的に賛同する立場である。武蔵国の事業に他国の有力者層が関与することは考え難く、武蔵国には既に影向寺や勝呂廃寺、西別府廃寺などの本格的寺院も建立され、国分寺創建前夜まで寺院造営の流れは確実に存在していたはずである。上植木廃寺の縦置き型は、高井が提示したように形式的・技術的な変化・変遷が生産地や出土遺跡の動向からある程度証明されたと言えるだろう。そうであれば武蔵国分寺に現れた「細弁系」も既に武蔵北部に伝播した後に考案され、さらに国分寺瓦として導入された独自の瓦当紋様と理解することも可能ではないだろうか。

では誰が武蔵北部から国分寺への縦置き型の導入を担ったと考えるべきか。論者はその



第6図 縦置型一本づくり  
製作技法の復元図 (上原1997)

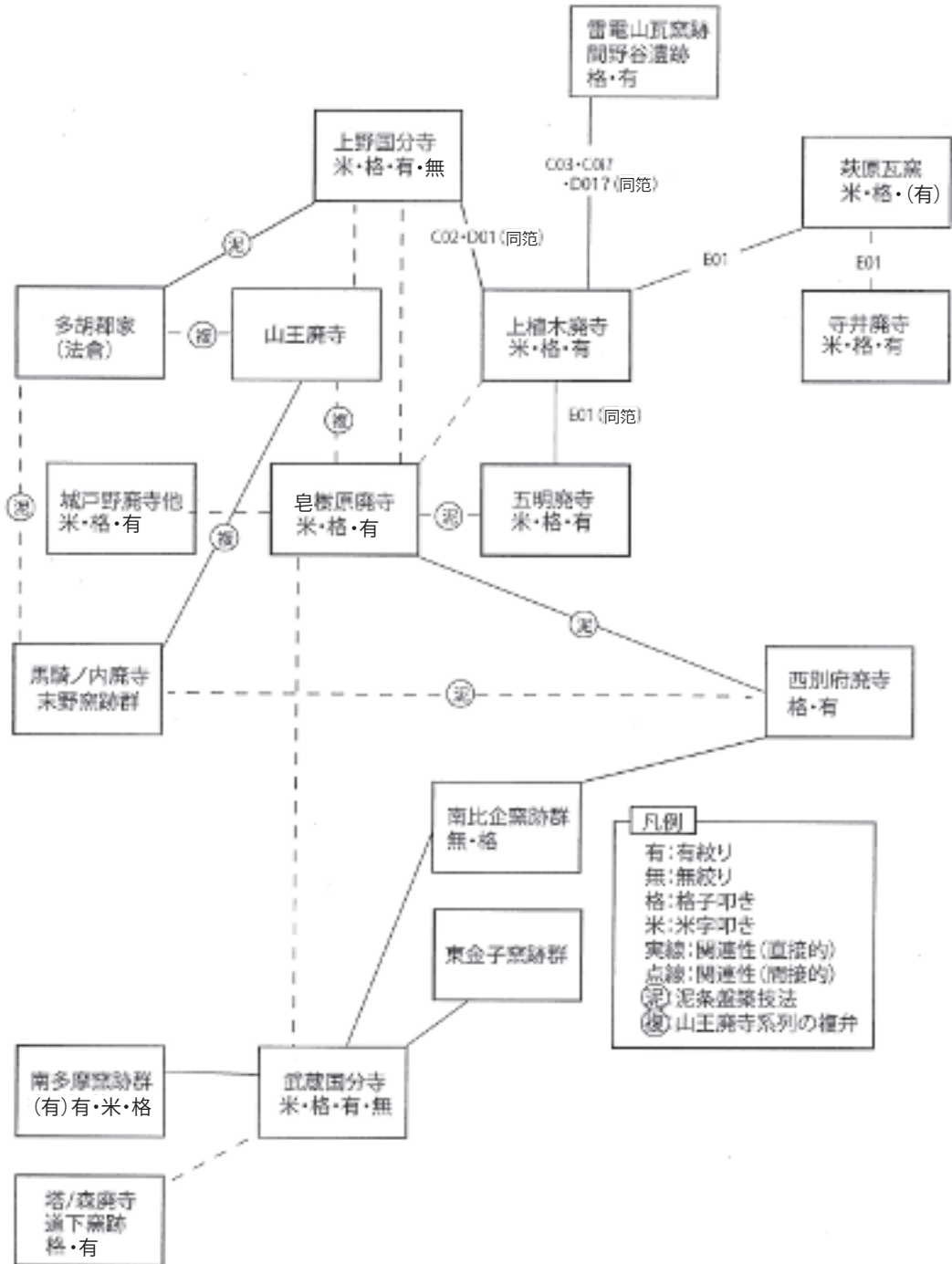


第7図 上植木庵寺の縦置型一本づくり  
製作技法の復元図 (出浦2007)



第8図 南滋賀庵寺系列の縦置型一本づくり軒丸瓦  
及び嵌め込み式軒丸瓦の製作技法の復元図 (北村2020)





第9図 縦置型一本づくり軒丸瓦関連相関図

候補となり得るのが皂樹原廃寺周辺を統括していた武蔵北部ではないかと考える。前述したように周辺に大規模な鉄生産に関わる遺跡群が存在することは、一地方組織では成し得ない事業を裏付けるものである。また、上野の西部・東部地域との関連性も深く、縦置き型の導入や複弁7弁軒丸瓦の武蔵地域への導入、武蔵北部の郡附属寺院に使用された複弁8弁軒丸瓦の分布する地域、瓦生産に須恵器工人を取り込むなど地域ネットワークを掌握する人物と武蔵国が関わって武蔵国分寺の造営にあたり、縦置き型の瓦工人を派遣させ南比企や南多摩での生産を行ったのではないかと推測する（第9図）。

また武蔵国分寺の「細弁系」には皂樹原廃寺等との同范例は存在しないが、珠紋の形態や調整など新旧の技術が混在する現象がみられる。また南多摩産と考えられる縦置き型では、南比企産のように造瓦に須恵器工人が関与した痕跡（平瓦凹面のナデや複数回に及ぶ側面のケズリなど）は見当たらず、純粋に瓦工人による造瓦が行われたと推測される<sup>(註10)</sup>。一方、もう一つの「上野系」とされる単弁8弁軒丸瓦は造瓦に武蔵国の関与があったのであれば、上植木廃寺からの瓦当紋様の系譜とするには不自然であり、既に造営されていた多磨寺（京所廃寺）の瓦を下図とした可能性も否定できないだろう。

次に縦置き型の製作技術では、国分寺例の中にも上植木廃寺で見られたような作業工程の盲点が見えてきた。第7図と8図は、主な縦置き型の製作工程を示した模式図であるが、実際にはこの模式図のように容易に製作できるものではないことも分かってきた。第7図では⑥～⑦、8図では⑦～⑧の作業工程において、不要部分を切り取った後、内型を外す工程が発生する。この時内型は瓦当裏面に収まっており、縦方向に抜けば布目等に何らかの痕跡が付く筈である。しかし、ほとんどの場合、そのような痕跡は確認できず、瓦当裏面から丸瓦部まで連続した布目が多くの場合で見ることができる。ではどのようにして内型を抜いたのか。国分寺の縦置き型は「細弁系」では破片が小さく痕跡は確認できなかったが、前述したように2期の瓦では瓦当裏面と丸瓦部が接する部分で、瓦当裏面凸帯側の布に細かい亀裂やナデが円弧状に見られた。これは范型の消耗による影響とするよりも、不要部分を切り落として残った丸瓦を凸帯側にずらして内型から外した痕跡と考えることができるのではないかと。それは内型の重さと関係があり、実際に内型を上方向に持ち上げて外すよりも少し凸帯側（製作者からすれば、恐らく手前側）に引いて外した方が容易で、しかも外した際の痕跡が最小限で済むなど、製作工程上合理的に作業が進められると理解した。なお、無絞りについては対象個体数も少なく、製作工程を十分検討するまでには至らなかった。今後の課題としたい。

## 結びにかえて

以上、「上野系」縦置き型を軸に、武蔵国分寺における縦置き型の系譜や導入された背景、製作工程などについて論じてきた。数十万枚を要したとされる国分寺所用瓦を考えれば分析した資料は余りにも少なく、仮説としても十分とはいえない。また、今回無絞りの縦置き型とともに触れなかった事柄に内型の構造や内型を包む布袋の形状や被せ方の問題がある。軒丸瓦は丸い形状をしているため、布で内型を包む場合は内型の形状に合わせた包み方や被せ方が求められる。そうしなければ必ず布の重なった部分や撓みなどが現れる筈である。一方、南滋賀廃寺や上植木廃寺の縦置き型では側板連結模骨で丸瓦部を製作されているが、どのような構造であったのか。ここにも内型の構造やそれを外す際の課題があり、布袋に関わる疑問も含めて瓦当裏面に残った痕跡と実際に使用されたであろう内型との溝は今日でも埋めきれていない。

## 註

- 1) 皂樹原廃寺の名称は、奈良・平安時代の集落遺跡である皂樹原・檜下遺跡（女堀大溝含む）から多量の瓦類が出土し、周辺に寺院跡の存在が推定されていることによる。
- 2) 一本づくりの表記には「一本作り」、「一本造り」など研究者によって「つくる」という文字は様々なに使用されるが、本文中では奈良文化財研究所が古代瓦研究会で用いた仮名表記の「一本づくり」に統一する。
- 3) 一本づくりに横置き型と縦置き型があることは、1990年代以降毛利光俊彦や上原真人によってその区分が明確になった。一本づくりに類する製作技法には「嵌め込み式」や泥条盤築技法などがある。「嵌め込み式」は、既に成形した丸瓦円筒の広端側に粘土を嵌め込み、範型Cを押し当てて製作するものである。「とも土」で製作される一本づくりとは異なり、広義では「接合式」と一技法といえる。一方、泥条盤築技法は縦置き型と類似するが、内型を用いず、丸瓦部はロクロで成形する。従って布は使用しないため、瓦当裏面および丸瓦凹面はナデの痕跡が残る。瓦生産における須恵器工人の関与を裏付ける傍証といえるが、縦置き型の出土遺跡では高い確率で確認できることから、技術的な関連性が注目される。
- 4) 縦置き型の初現とされる南滋賀廃寺、檀木原遺跡出土軒丸瓦の年代は、天智朝末から天武朝とされ、上野国への伝播とは少なくとも四半世紀程の年代的な齟齬がある。伝播は近江国から飛騨国、信濃国、甲斐国、そして上野国へと伝わったと考える研究者は多いが、同時に飛騨国、信濃国、甲斐国の縦置き型は無絞りでであることに明確な根拠が提示されていないのが現状である。
- 5) C02は単弁8弁で、上野国分寺や瓦窯と推定される間野谷遺跡で同範が確認できる。しかし、上植

木麿寺では小破片1点の出土であるため、今後の調査等による成果を待ちたい。

- 6) 精進場遺跡は奈良・平安時代の集落遺跡であるが、中房に「+」と入る単弁8弁の縦置き型や米字叩きの平瓦などが出土した。隣接する城戸野麿寺でも「細弁」系の縦置き型や米字叩きの平瓦、武蔵北部の推定郡名寺院から出土する複弁8弁軒丸瓦や三重弧紋軒平瓦などが出土した。縦置き型や米字叩きなど上野国の寺院の影響を受けながらも武蔵北部広く分布する複弁軒丸瓦や軒平瓦の組み合わせを保持するなど皂樹原麿寺と同様な在り方を示し、地方支配を考える上でも注目される遺跡である。
- 7) 昼間孝志2005「国分寺造営頃の地方寺院—米字状叩きの分布にみる寺院造営のすがた—」において西別府麿寺出土平瓦の大型格子叩きに「米」字を彫り込むと上植木麿寺と同じ規格の米字叩きになると仮説を立てた。
- 8) 山王麿寺と同範か否かは現時点では不明である。また榛沢郡馬騎の内麿寺、緑野郡水窪遺跡（緑野寺？）では山王麿寺系列の複弁7弁軒丸瓦、武蔵北部の複弁8弁軒丸瓦が出土し、上野・武蔵を挟んだ地域の在り方を考える上で興味深い現象である。
- 9) 南比企では単弁8弁も存在する。現時点では中房に「父」の文字が入る場合が多い。
- 10) 南多摩と南比企では、創建期の瓦づくりに相違がみられる。それは胎土の相違以外に側面や端面の調整、平瓦の角度の在り方、叩き具の使い方などにも微妙な違いがある。双方とも瓦工人を中心とした造瓦組織で編成されているが、規格等がどう遵守されていたかにも注目していくべきだろう。

## 引用・参考文献

- 有吉重蔵 1986「遺瓦からみた国分寺」『国分寺市史』上巻
- 有吉重蔵 1986「武蔵国分寺創建期の造営過程」『東京の遺跡』13号 東京考古談話会
- 出浦 崇 2007「縦置き型一本造り鎧瓦の製作と波及—上植木麿寺出土瓦の検討から—」『国士舘考古学』第3号 国士舘大学考古学会
- 出浦 崇 2019「縦置き型一本づくり技法の伝播に関する一試論」『地域考古学4号』地域考古学研究会
- 稲垣晋也 1970「瓦当と丸瓦の接合の仕方」『飛鳥・白鳳の古瓦』奈良国立博物館
- 上原真人 1997『瓦を読む』講談社
- 大脇 潔 1991「丸瓦の製作技術」『研究論集IX』奈良国立文化財研究所学報第49冊
- 梶原義実 2018「一本づくり、一本づくりに関する諸問題」『8世紀の瓦づくりⅦ 一本づくり、一枚づくりの展開1（東日本編）』奈良文化財研究所
- 金子裕之 1983「軒丸瓦製作技法に関する二、三の問題」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所
- 北村圭弘 2021「近畿地方東部の一本づくり・一枚づくり—近江の出土資料を中心に—」『古代瓦研究

- X——一本づくり・一枚づくりの展開2（西日本編）—— 奈良文化財研究所
- 木村捷三郎 1969「平安中期の瓦についての私見」『延喜天曆時代の研究』吉川弘文館
- 櫛原功一 1990「第6章第2節瓦」『天狗沢瓦窯跡発掘調査報告書』山梨県敷島町教育委員会
- 小林行雄 1964「屋瓦」『続古代の技術』塙書房
- 酒井清治 1982「瓦の製作技法について」『埼玉県古代寺院跡調査報告書』埼玉県県史編纂室
- 酒井清治 1989「武蔵国分寺創建期の須恵器と瓦」『埼玉考古』第26号 埼玉考古学会
- 新尺雅弘 2020「檀木原瓦窯の造瓦技術とその展開」『古代文化』第72巻第3号 公益財団法人 古代学協会
- 鈴木久男 1990「一本づくり軒丸瓦の再検討」『畿内と東国の瓦』京都国立博物館
- 清地良太 2007「上野国・武蔵国における瓦工の動向—縦置型一本造り軒丸瓦の検討から」『駒澤考古』第32号 駒澤大学考古学研究室
- 高井佳弘 2002「一本造り軒丸瓦における布と模骨」『研究紀要』第20号 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 高井佳弘 2004「上野国における一本造り軒丸瓦の導入と展開」『研究紀要』第22号 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 坪井清足 1988「一本づくり軒丸瓦について」『高井悌三郎先生喜寿記念論集 歴史学と考古学』真陽社
- 林 博通 1999「南滋賀廃寺式軒丸瓦製作技法」『瓦衣千年』森郁夫先生還暦記念論文集 真陽社
- 昼間孝志 2005「国分寺造営頃の地方寺院一米字状叩きの分布にみる寺院造営のすがた—」『古代東国の考古学』大金宣亮氏追悼論文集刊行会編 慶友社
- 昼間孝志 2018「須恵器工人の瓦づくり—泥条盤築技法導入の背景—」『研究紀要』第32号 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 昼間孝志 2020「関東地方西部の一本づくり・一枚づくり」『古代瓦研究Ⅸ——一本づくり・一枚づくりの展開1（東日本編）』奈良文化財研究所
- 前田清彦 2020「東海地方の一本づくり・一枚づくり」『古代瓦研究Ⅹ——一本づくり・一枚づくりの展開1（東日本編）』奈良文化財研究所
- 三好清超 2021「飛騨地域で出土する縦置き型一本づくり軒丸瓦研究の現状」『斐太紀第27号 特集考古学から見た飛騨』飛騨学の会
- 山路直充 2013「山国の寺—情報伝播からみた山国の交通—」『古代山国の交通と社会』八木書店